

Title	D・S・ランドス フランス難局の統計的研究
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.8/9 (1951. 9) ,p.548(84)- 549(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19510901-0084
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510901-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文紹介

D・S・ランドス

『フランス難局の統計的研究』

(D. S. Landes, "The Statistical Study of French Crises." Journal of Economic History, Vol. 10, No. 2, Nov. 1950, Pp. 195-211.)

数字は言語では表現するに不可能な知識を正確に授けて呉れる。然し老大な数字を整理して一層現実的な結論を引出すことは仲々困難であるから、過去の経済事象を数字を以て理解しようといふ立場は未だ必ずしも一般的にはなつてゐない。

ラブルースが第十八世紀フランスの経済事情について關説した場合、然しかかる立場に據つてゐた。尤もラブルースは官廳の各種統計を主要な根據として、特に收穫量の増減が當時の社會階級に對し如何なる影響を及ぼしたかを考察し、そして法外に高い運賃・農村の絶對的な優位・弾力性を缺く生産・大衆支出において、不常に多い食料費部分によつて特徴づけられた舊い型の交換經濟が行なはれた第十八世紀のフランスについて、端的には次の如き景氣循環を主張してゐるのであつた。當時フランスの景氣循環が、かかる經濟事情の下において主として農業によつて決定されたことは絶對の事實である。

雇傭量が減少して社會不安は募つた。農業を主要産業としてゐた第十八世紀のフランスについて、收穫量の顯著な減少が齎らすかかる結果は殆んど必然的といはねばならない。

六、従つてこの國を襲つたかかる不況は、豊作に恵まれ國民の大部分を占める一般の農民が裕福になつて初めて正常に復すべきものであつた。

收穫量の増減が社會の全般に對して及ぼした影響は以上の如く決して單純なものではなかつた。收穫量の僅かな減少による穀價の急激な上騰は、農村の好況を導き、勢ひ工業の發展をも刺戟すべき力となつた。然し收穫量に起つた顯著な減少は農村の甚しい窮乏から一般農民の購買力を減退せしめ、かくして農業を除く他の諸産業も今荒廢の極に達したのであつた。

数字は、然し必ずしも實體を傳へて正確であるとはいひきれない。現にラブルースが上述の結論のために利用した官廳の各種統計は、納税のための各自の申告に基づくものであつたから、勢ひ多分に主觀的で疑問の箇所も極めて多く、従つてそれ等を使用する際には数字の一應の吟味から掛らなければならぬといふまでもない。しかもラブルースがこの點に對する配慮を缺く以上、右の結論にはかかる立物から若干反省が加へらるべきであらう。以下がこの種の批判のための具體的な主たる基準である。

一、結論の基礎となる数字は或る程度まで正確でなければなら

論文紹介

一、收穫量の僅かな減少も、大衆支出の大半が食費に充當された第十八世紀のフランスでは、穀類價格を急激に押し上げる。かかる際に農民が全體として多大の利益を享受することはいふまでもない。

二、但し收穫量に顯著な減少が起つた場合は事情が自づと違つて来る。そしてかかる際には、結果として國民の經濟生活全體が當然完全な麻痺状態に陥つてしまふのである。これを第十八世紀フランス人口の壓倒的部分を占めた農民について見れば、食物・種子及び他の必要品のための経費が常に一定である限り、收穫量の顯著な減少によつて市場に販賣すべき量も極度に削減せざるを得ないから、従つて最も裕福な少數の農民を除いた大抵の農民は非常な収入減に苦しむことになつた。農村収入におけるかかる急激な減少は瘦地の耕作を放棄したことによつて尙一段と促進された。

三、第十八世紀のフランスにおいては農村人口が全人口の大部分を占めてゐたから、農村のかかる窮乏によつて工業製品の賣行が不振を極めることになつたのはいふまでもない。

四、工業製品の賣行不振は都市居住者に大打撃を與へた。特に都市における貧民階級の零落が甚だしく、彼等の生活の悲惨は食糧の入手困難によつて一段と深められて行つた。

五、商業活動は制限された。工業製品の産額は著しく低下した。

ない。

二、正確の程度が完全である必要がないからといつて、何も不適當な数字を随時任意に利用して差支えないといふわけでは決してない。

三、数字による理解の態度は、本來歸納的な研究の進め方にはかならない。従つて如何なる先入觀も、縱令それが論理的なもの又は有用なものであつたにしても、嚴正な数字と矛盾する限り破棄されるべきである。(渡邊國廣)

S・G・チェックランド

『バーミンガム派の經濟學者、一八一五年—一八五〇年』

(S. G. Checkland, "The Birmingham Economists, 1815-1850." The Economic History Review, Second Series, Vol. 1, No. 1, 1948, Pp. 1-19.)

廣く信ぜられ強く唱道された見解が政治的表現を全然持たないといふ事は經驗に反する。マンチェスター派はリカード學派の政治的表現であり、バーミンガム派は過少消費説に最も近く、完全雇傭を生ずる自動的組織の實在性を否定した人々の考への政治的具體化であつた。いまケインズの言外の挑戦を探り上げて、ナポレオン戦争後に過少消費説が如何に被ひ清められたか

八五 (五四九)